

善導撰述の成立前後について

藤原 凌雪

一

善導の著述は五部九卷といわれて来た。この外にも若干の書名が古來の話題となり、又燉煌出土本の中にも西方禮讚文や西方讚が發見されてはいるが、確實なものとしては所謂五部九卷の内容を出でない。就中觀經疏四卷は古來解義分又は本疏と呼び、その他を束ねて行儀分又は具疏と呼んで来た。その所謂本疏と具疏との成立前後については、良忠が法事讚私記に於て、本疏を初めに置き、具疏を後と定めてから（淨全四の三三頁）後の學者殆どこれを踏襲して来たが、これと反對に具疏を先として本疏を晩年の作と推定したのが今岡達音氏であつた（淨土學八）。私は少くともこの本疏具疏の成立前後に就ては、今岡氏の啓拓に全幅の敬意を表したいと思う。蓋しこの兩者には思想的に見て相當の隔りがあり、時としては教義的に矛盾する表現も少しとしない。古來具疏を從假入眞の書とか信後味道の爲とかと解釋して本疏との矛盾點を會通せんとする試みもないではなかつたが、それよりも思想の發展、信仰の圓熟ということを考慮に入れてその成立前後を検討することが、より自然だと考えられる。

然し乍ら更に進んで具疏の中の前後關係はどうであらうか。良忠

二

が法事讚、觀念法門、往生禮讚、般舟讚と次第したのは、暫く五行の順序を藉りたのに過ぎない。今岡氏は思想内容より推して、四部の中では觀念法門を最も後としていられるが、私は寧ろこれを初期に扱い、法、般を中期に、禮讚を後期に、而も觀經疏と接近した時代に措定して見たいと思う。唯この場合その思想發展の孰未を知る尺度は、矢張善導の撰述自身の中に求めるより外はない現狀である。換言せば經疏の中に善導自らの設定した正雜二行、稱勝觀劣、凡夫入報などの教判は、他の著述の純雜を知る批判の尺度として參照し得るものであらう。善導が歸依した有縁の經は觀經であり、佛の證誠と聖僧の指導を得て註釋したものが觀經疏だからである。然るに、觀念法門を披見するに、前者に見得る鮮かな廢立の精神がこゝでは一切埋没されている。觀佛三昧と念佛三昧が同視されているし、經疏で不問時節久近と純化されている稱名も、こゝでは未だ三萬六萬十萬と多念を上げむ念佛でしかない。

たゞ此處に注意したいのは、右の事實は觀念法門の前半即ち三昧行相分に据つての見方であつて、その後半即ち五縁功德分は念佛者の五種増上縁や本願加減文を含んで思想的に相當な發展が見られる。この點觀念法門は本來二つの書であつたのがいつしか合冊されたものであるとなす望月信亨氏の所論は卓見である。そしてこの見

方をとれば善導の著述は六部十卷ということになる。私は親鸞撰述中に引いた善導釋文の數を調べて見たが、總計約百五十文に及ぶ中觀念法門は最少で僅か七文、而もその全部が五緣功德分である。又西本願寺から發見された眞筆の觀經小經集註の餘白及び裏面に書込んである釋文百九十二文の中觀念法門は十七文あるが、これ亦悉く後半からの引用で前半の部は全く敬遠されている。これも前後關係を見る一つの示唆にはなるであらう。

觀念法門（前半）と反對に、禮讚は律法的な所少く純正淨土教の特色が豊かであり、殊に安心起行作業という實踐方軌を明示すると共に、一行三昧や專雜得失を説いて、觀念に對する稱名の優越性を判然とさせていることは、所謂具疏中最も經疏に接近していると思ふ所以がある。

三

最後に經疏と禮讚の前後について補足すると、私は次の様な理由から疏前讚後の舊説に反對する。第一に、善導は經疏に於て凡夫相應の實踐法として五正行を構成した。かゝる獨創的なものを作り乍ら、それ以後に、世親の五念門を借用することは、たとえ大修正の上とはいえ、聊か逆行の感がある。私は寧ろ世親の五念門を凡夫相應に轉用しつゝ、禮讚の起行として活用し、後更に自らの創意を練つて經疏の五正行を案出したものと思考する。

第二に兩書の三心釋には夫々特色があつて差支はないが、而も當時の時代的な環境を考えると、理論を弄ばぬ實踐的行業としての禮讚の素朴な三心釋が先ず生れ、それが善導の聲價高まり（とりわけ龍門大佛造顯の六十才前後に）これに伴つて内には懷惴少康などの入室、外には異學異見の徒の嫉視と反撥も顯著となるに至つて、善

善導撰述の成立前後について（藤原）

導一代の教學の大成を試みたのが觀經疏であり、かゝる意識的な要望に基づいて擴充されたのが經疏の三心釋であらう。

第三に經疏中には次の如き禮讚日中讚と全く共通した四連の詩が「讚曰」としてのせてある。即ち定善義水觀の「地下莊嚴七寶幢」等の八句、散善義上下品釋の「上輩上行上根人」等の八句、同中下品釋の「中輩中行中根人」等の八句、同下々品釋の「下輩下行下根人」等の十二句である。これらの句を經疏執筆の折斷片的に作つておいて後にかゝる感興を憶出し補足して禮讚を著したと見ることは、詩作者の心理に疏いと思ふ。寧ろ禮讚用に作つた讚文から抄引したか、若しくは、經疏、禮讚の底本となつた原本があつたかであるが、後者の如き底本に就ては今の所全く手懸りが無い。

其他兩書の内容體裁全體の比較から、私は觀經疏が晩年の圓熟した最後作であり、禮讚はこれに先行する準備期の作品だと考えたのである。